

論 文

# 海外派遣研修（オーストラリア）に参加した 学生の英語スピーチ分析

大湊佳宏<sup>1</sup>・占部昌蔵<sup>1</sup>・田中真由美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>一般教育科—英語 (Liberal Arts-English, Nagaoka National College of Technology)

## AN ANALYSIS ON STUDENTS' ENGLISH SPEECH AFTER EXPERIENCING ONE-WEEK HOMESTAY IN AUSTRALIA

Yoshihiro OMINATO<sup>1</sup>, Shozo URABE<sup>1</sup> and Mayumi TANAKA<sup>1</sup>

### Abstract

It has been an interesting issue among English teachers here at Nagaoka National College of Technology (NNCT) if the participants are able to positively benefit from their stay in another country, especially on their linguistic aspects. Ten students from NNCT participated in the study abroad program in Australia in March, 2010, and eight out of the ten students were asked to make a short English speech about their family in Japan and their host family in Australia. Their speeches were videotaped before they left Japan and after the program. The videos and scripts are analyzed from linguistic perspectives.

**Key Words:** *English speech, fluency, accuracy, filler, imitation*

### 1. はじめに

長岡工業高等専門学校（長岡高専）では、平成 16 年度の中国黒龍江工程学院との学術交流協定の締結をはじめとし、中国、マレーシア、ベトナムなどの国々へ学生の海外派遣研修を行っている。訪問国の学生と「ものづくり」を通して文化や現地の人々との交流をはかり、長岡高専の多くの参加者は大変満足をして帰国している。過去 4 年間で、年間約 20 名程度の希望者を募り海外研修を実施している。英語科の教員も、過去にマレーシアとベトナムの海外研修の引率を経験しており、海外での体験が高専の学生に与える影響を実感している。しかし、英語科の教員は「ものづくり」の場面になると工学の専門

知識が無く、「ものづくり」の交流をサポートすることができなかつたり、事前指導においても、プログラミングについての専門知識がないために、専門の教員に頼らざるをえなかつたりという状況があつた。

平成 21 年度においては、特別教育研究費（国際性の向上）の採択もあり、長岡高専では「アジア高等教育機関との交流および地域連携による人材育成」の一環として、オーストラリアに 10 名の学生を派遣し、5 名の教員が引率をすることができるとなつた。さらに、「ものづくり」を主目的とせず、「語学研修」を前面に打ち出した本海外研修プログラムは、長岡高専において初めての試みであつた。語学研修を主たる目的とすることで、事前研修で「英会話」や英語での「プ

レゼンテーション」指導を、英語教員が担当することができるようになった。他高専での海外研修の報告では、参加学生の勉強に対するモチベーションの向上が報告されている<sup>1)</sup>。しかし、英語力に関する記述はあまり見あたらない。本論文では、英語教員の立場から、参加者の英語力の変化に焦点を当て、本研修は効果的に行われたのか、彼らの英語力は向上したのかを検証する。

## 2. 研究方法

### 2. 1 参加者

オーストラリア語学研修には、1年生が1名、2年生が3名、3年生が1名、4年生が3名、5年生が1名、専攻科1年生が1名の合計10名（男子7名、女子3名）が参加した。いずれも海外に住んだ経験はないが、自ら研修に興味を持ち参加を希望した10名である。分析の対象となったのは、事前と事後の両方のビデオ撮影を行うことのできた8名（2年生3名、3年生1名、4年生3名、専攻科1年生1名）であった。

### 2. 2 データ

#### (1) 事前データ

オーストラリアに出発する事前研修の途中（2月）に、事前研修の参加者に「英語で家族紹介」をしてもらった。一人ずつビデオの前で英語の即興スピーチを2分間続けてもらい、言うことがなくなったらその時点で終了とした。スピーチのテーマは、ビデオを撮影する直前に伝えた（事前に準備をする時間は与えなかった）。

#### (2) 事後データ

5日間の研修すべてが終了し、研修の最終日（3月25日）、シドニー市内のホテルにてビデオ撮影を再び行った。スピーチのテーマは「ホームステイ先の家族紹介」とし、事前データ記録時と同じく、参加者一人ずつに英語での即興のスピーチを課した。この時も事前データの採取の時と同じように、他の参加者にはテーマを教えないように指示をし、スピーチの準備をする時間は与えなかった。

### 2. 3 分析方法

大塚<sup>2)</sup>が行った海外語学研修の研究では、15日間の海外研修の事前・事後において、参加学生の英語の変化をCASEC（英語コミュニケーション能力判定テスト：株式会社教育測定研究所）の総点によって

比較したが、事前・事後でスコアは伸びているものの、統計的な有意差は認められず、「英語力に肯定的な変化が起こるとは言えない」としている。本研究では、大塚<sup>2)</sup>の使用した筆記試験で「語彙の知識」「表現の知識」「リスニングでの大意把握」「具体情報の聞き取り」ではなく、Ellis<sup>3)</sup>がまとめているような、Fluency（流暢さ）やAccuracy（正確さ）に焦点を当て、分析を行った。

測定方法には様々あるが、参加者が産出した英語スピーチの長さ、英語のレベル（英語力）を考慮して、以下の通りの尺度で測定を行った。

- (1) 流暢さ1：各参加者の英語スピーチで産出された、総単語数（filler（"uh"や"eh"といったもの）は除く）。
- (2) 流暢さ2：英語スピーチがスタートした15秒後からの30秒間に発せられた、総単語数（fillerは除く）。
- (3) 正確さ：英語スピーチ内に出現した総文（TS:total number of sentences）に対する、文法的にエラーのない文（EFS:error free sentences）の割合（R:ratio）。ただし、等位接続詞で節と節が結びついている場合は、その節を文としてカウントした。また、スピーチの中で、"She is, she is from the U. S."等の繰り返しや、"He goes to, went to the party."等の言い換えは「正確な文」としてカウントした。
- (4) filler数：スピーチのビデオを見る際に、fillerと呼ばれる言いよどみや、発話の内容や言葉を考えている間に発せられる"uh"等の言葉の出現数をカウントした。長時間の対話や長いスピーチの分析ではないので、個々の差は幾分かあるものの、一定の時間を区切らずにカウントを行った。

本研究では、分析対象者となる海外語学研修の参加者が、8名であり、被験者の数が少なかったために、採取した各データの事前・事後の差の検定を統計的に処理することは行わないことにした。

### 2. 4 リサーチ・クエスチョン

RQ1：長岡高専の海外語学研修の前後で、参加学生の英語の流暢さに変化はあるか。

RQ2: 長岡高専の海外語学研修の前後で、参加学生の英語の正確さに変化はあるのか。

RQ3: 長岡高専の語学研修の前後で、参加学生の産出する英語スピーチに含まれる filler の数に変化はあるのか、またその filler の出現回数には何か意味があるのか。

### 3. 結果と考察

#### 3.1 流暢さ

流暢さ1(1スピーチの中で産出された総単語数)の結果は以下の表-1の通りであった。参加者8名全員の総単語数が増加したことが見てわかる。学生Cと学生Hの伸びが顕著であることも特徴的である。スピーチの長さ自体が伸びたのも、英語スピーチで使用された、総単語数が増加した要因の一つであろう。

多く総単語数が伸びた学生Hは、帰国後にも積極的に英語学習に取り組んでおり、以前受験していた外部試験のスコアも出発前と帰国後では大きな変化があったと報告があった。(詳細は、他稿に記載予定)。学生Cは、総単語数の値の伸びが最大であったわけだが、大きな理由は事前のスピーチの総単語数があまりにも少なかったことがあげられる。事前のスピーチの中では沈黙の時間が長かった学生Cだが、オーストラリアの研修後には、これだけの英単語数を自ら発しているところを見るのは、著者の1人で学生Cを指導している英語教員にとって驚きであった。

次に流暢さ2であるが、これは流暢さ1とは違い、すべての参加者が伸びたわけではなかった(表-2参照)。スピーチのどの部分を切り取り分析するかによっても結果に差が出るかもしれないが、今回は8名中3名の学生(学生B, F, G)の流暢さが、マイ

表-2 総単語数/30秒

学生	事前	事後	差
A	27	33	6
B	21	17	-4
C	10	21	11
D	24	32	8
E	21	36	15
F	30	27	-3
G	28	24	-4
H	17	32	15

ナスの結果となった。ビデオを見る限りでは、他の参加者と同じく、オーストラリアでのホームステイ先の家族紹介を、スムーズに、さらに、一つひとつを楽しそうに思い出しながら話していたので、話す内容は多くあったはずなのだが、著者の期待からは、はずれた結果となった。

流暢さ2が最も上がった学生EとHの共通点は、同じホームステイ先に滞在をしたことである。学生EとHは他の学生よりもホームステイ先の家族と交流する機会を多く持ち、その経験をインタビューの聞き手(教員)とシェアをしたいと思う気持ちが大きかったと想像することができる。

流暢さ2に関しては、話すスピードに関係してくる。話すスピードが速い=流暢である、と考えたわけであるが、英語のスピーチをした場面を比較すると、事前のビデオ撮影は教室や、英語科準備室の中で行われたが、事後のビデオ撮影はホテルの一室で、よりリラックスしたムードがあり、話し方がゆっくりになった可能性がある。また、「日本の家族紹介」と「ホームステイ先の家族紹介」では、スピーチのテーマが違ったわけだが、どちらがスピーチがより作りやすかったかによっては、違う結果になっていたかもしれない。今回の状況では、オーストラリアが初海外の学生が多く、海外で体験した多くのことを早く友達や知り合いに伝えたいというモチベーションが、流暢さ1の増加の要因であるとも考えられる。個々の学生のケースについて述べると、たとえば2番目に流暢さ2が減少した3名の学生の共通点は、3名とも低学年(学生Bと学生Gは2年生、学生Cは3年生)であることである。しかし、この年齢と正確さの因果関係があるのかを検証するには、このデータでは十分ではない。

#### 3.2 正確さ

正確さに関しては、以下の表-3にまとめた。各学生の事前・事後のEFSの出現率の差が表の1番右

表-1 総単語数

学生	事前	事後	差
A	30	96	66
B	58	87	29
C	31	137	106
D	45	88	43
E	88	100	12
F	52	72	20
G	69	72	3
H	87	187	100

に記されている。この割合が大きければ正確さが増したことを示し、低ければ正確さが低下したことを示している。結果、学生 A, B, E, H の 4 名は正確さが増したが、学生 C, D, F, G の 4 名は正確さが低下している。よって、約 1 週間の海外研修を経験することで、英語スピーチの正確さが上がるとは断言しづらい結果となった。

表 3 から読み取れる、その他の特徴としては、EFS の増加があげられる。学生 F と G 以外は、どの学生も事前よりも事後のほうが EFS の出現回数が増えている。そのほかには、学生 B と学生 E の EFS の出現 Ratio が 50% 以上になっていることも、注目すべき点である。

主なエラーの種類は 3 人称単数現在形の s の欠如や、冠詞または人称代名詞の所有格の欠如が見られた。また、同じくらい多かったエラーは動詞の時制であった。事後のスピーチでは、参加者はオーストラリアでの出来事を、過去形で話さなければならないが、現在形を使用したり、また不規則変化をする動詞の活用を間違ったりしていた。

その他にも、以下のようなエラーも見受けられた。

#### <エラーの例①：動詞の不規則変化>

“And he *drived*, uh, with Jan at...”

“He *runed* very fast.”

#### <エラーの例②：代名詞の使用方法>

“but *he* injured *her* right arm and shoulder.”

表 3 エラーフリー文の出現率

学生	事前			事後			差
	EFS	TS	Ratio	EFS	TS	Ratio	
A	1	5	20%	4	17	24%	4%
B	3	7	43%	5	9	56%	13%
C	1	4	25%	2	17	12%	-13%
D	3	6	50%	4	14	29%	-21%
E	5	13	38%	7	14	50%	12%
F	2	8	25%	2	11	18%	-7%
G	5	12	42%	2	8	25%	-17%
H	5	11	45%	11	23	48%	2%

\*EFS=Error Free Sentence

\*TS=Total number of Sentences

\*Ratio=The Appearance ratio of error free sentence

反対に、正確だった文の特徴もはっきりしている。それは、単純で、中学校の時（英語を勉強し始めた時）繰り返し使用するような、フレーズとして記憶できる文である。たとえば、

“Tiffany is 17 years old. Tom is 8 years old.”

と、いったような文である。その他にも、

“She is very beautiful.”

“He is powerful.”

といった、比較的単純な構造で、冠詞を含まず、さらに時制を気にしなくても、エラーなしで通じる文をカウントすることが多かった。話し言葉にどれだけ文法的な正確さを求めるのか、という問題もあるが、単純な英語構造であれば正確に発話できることが観察された。

学生 F の英語スピーチからは、やはり約 1 週間の海外語学研修では、正確さは補修されないという例が見つかった。事前の「家族紹介」と、事後の「ホストファミリー紹介」で同じ構造の英文を使用し、その両方もが、文法的に間違っていたのである。学生 F は以下のような表現を使用していた。

#### <事前>

“My mother *work to take* shinkansen.”

#### <事後>

“Ma..., uh, father *works, works con, uh, make works to make* fence.”

事前では、「新幹線に乗って仕事に行く。」と表現し、事後では「フェンスを作る仕事をしている。」と表現したかったのだろうが、その両方で失敗している。その間違い方が、「動詞+to+動詞の原形」と両方になっており、彼女の間違い方の癖は、この研修を通して修正されることが無かったことを示している。この部分でも、今回の海外語学研修が、学生の英語スピーチの正確さに与えた影響の少なさを垣間見ることができる。

### 3.3 filler 数

英語のスピーチの中で“uh”と、一息で言っているものを 1 filler としてカウントした。その結果が以下の表 4 のである。

学生 A 以外は、ごく少数であるが filler の使用回数が増加している。学生 A は、よほど考えを巡らせながら英語の即興スピーチをしたのか、filler の数が、事前よりも 10 回増えている。事前と事後で、英

表-4 filler の出現数

学生	事前	事後	差
A	4	14	10
B	9	10	1
C	1	7	6
D	2	3	1
E	2	5	3
F	0	5	5
G	0	3	3
H	5	6	1

語スピーチ内で使用した総単語数が増えているので、それに比例して filler の出現数が増えているとも考えられるが、この増加が意味することは、憶測ではあるが、英語のネイティブ・スピーカーと会話を交わす機会を多く持ったことで、filler の使用方法を暗示的に習得したのではないかと考えられる。Filler だけに限らず、EFS の出現率が増加した学生も、この点で暗示的、ないしは明示的に英語のネイティブ・スピーカーの使用言語を意識し、それを模倣して習得した表現があったのではないだろうか。

#### 4. まとめ

(2010. 10. 4 受付)

本論文では、学生の出発前（事前）と到着後（事後）の英語スピーチの変容に焦点をあて、分析を試みた。流暢さに関しては、スピーチのテーマの違いがあるものの、ある程度の伸長が現れた。

また、正確さについては、それが現れなかった。目標言語を使用する国に滞在することで、その国で使用されている言語を暗示的に習得するかもしれない可能性も出てきた。8名の参加学生のデータのみで、全てを一般化することはできないが、今後海外研修に参加する学生を対象にし、調査を継続し行っていく必要がある。

今回の研修は、本校初の海外「語学」研修ということで、不慣れな部分が多々あり、集めたデータは一般化を立証するためには不完全なものである。しかしながら、原口 他<sup>4)</sup>が述べるように、研修後の参加学生の様子を継続して考察する必要がある。大塚<sup>2)</sup>も研修終了5ヶ月後の「英語授業不安」の減少について言及し、小寺<sup>5)</sup>も研修後の学生の授業態度について述べているように、海外研修の参加者への影響は、実は即座に現れるものではなく、時間をあけ

て現れる可能性があるのではないだろうか。この点についても、さらなる調査、研究が必要である。

#### 参考文献

- 1) 上泰, 大向雅人, 宮本行庸, 藤野達士: 海外見学旅行における高等教育機関訪問の効用, 第32号, 高専教育, pp. 877-880, 2009.
- 2) 大塚賢一: 2週間の海外語学研修が学生のコミュニケーション能力と英語学習不安に与える影響とその期間, 関東甲信越英語教育学会紀要, Vol. 22, pp. 35-46, 2008.
- 3) R. Ellis: Planning and task-based performance: Theory and research, Planning and Task Performance in a Second Language, pp. 3-34, John Benjamins Publishing Company, 2005.
- 4) 原口治, 御築雅博: 「海外派遣プログラム」(2005年度実施)ー引率教員と派遣学生による共同考察, 高専教育, 第32号, pp. 945-950, 2009.
- 5) 小寺健志: 福井高専とオーストラリア・バララット大学との姉妹校提携ー海外研修の英語教育的意義についてー, 全国高等専門学校英語教育学会研究論集, pp. 75-82, 2007.

